

召された時のままで

コリント人への手紙第一 7章 17-24 節

はじめに

今日の説教題は、「召された時のままで」としました。というのは、今日の聖書箇所「召された時のままで」という言葉が三回繰り返されているからです。

17 節には、「**それぞれが神から召された時のままの状態です**」とあり、20 節には、「**それぞれ自分が召された時の状態にとどまっていなさい**」とあり、24 節には「**それぞれ召された時のままの状態、神の御前にいなさい**」とあります。

今日の聖書箇所での「召された時」というのは、「イエス様を信じてクリスチャンになった時」のことです。当時の教会には、イエス様を信じてクリスチャンになったら、生活状態を変えようとする人たちがいたようです。例えば、イエス様の再臨がすぐに来るからと言って仕事を止める人、イエス様の奉仕に専念したいからと言って離婚する人など。

しかしパウロは、イエス様を信じてクリスチャンになったからといって、生活状態を変える必要はない、むしろそのままの状態でもクリスチャンとして歩みなさいと言うのです。

独身であったら、独身のままクリスチャンとして歩みなさい。結婚していたら、結婚したままクリスチャンとして歩みなさい、奴隷であったら奴隷のままクリスチャンとして歩みなさいと言うのです。

私たちもクリスチャンになったからといって、特に生活状態を変える必要はありません。学生は学生のままで、会社員は会社員のままで、主婦は主婦のままでクリスチャンとして歩めばよいのです。ただし、明らかに罪深い職業であったり、罪深い習慣があったり、礼拝を守れない状態であった場合は、変える必要があるかもしれません。しかし基本的には、私たちはクリスチャンになった時の生活状態のままで、クリスチャンとして歩むべきなのです。

1. 召されるとは？

パウロは、「イエス様を信じてクリスチャンになった時」のことを、「召された時」と表現します。この「召される」という言葉は、「呼ばれる」「招かれる」という意味の言葉です。

私たちがイエス様を信じてクリスチャンになったのは、決して自分の力ではありません。私たちが信じる前に、神様が私たちの名を呼び、私たちをご自身のもとへ招いてくださったからこそ、私たちは信じることができたのです。

イエス様はこう言われました。「**あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました**」(ヨハネ 15:16)。私たちは、私たちがイエス様を選んで信仰を持ったのではなく、イエス様が私たちを選んでくださったからこそ、信仰を持ちクリスチャンになったのです。もちろん私たちはそれぞれ、悩んだり迷いながら信仰を決断したと思います。しかしその背後には、神様の一方的な選びがあったのです。私たちの信仰は、この神様の一方的な選びに支えられているものなのです。

2. 重要なのは神の命令を守ること

コリント教会には、ユダヤ人のクリスチャンも異邦人のクリスチャンもいたようです。ユダヤ人のクリスチャンは、旧約聖書の律法に従って「割礼」を受けていました(レビ記 12:3)。割礼とは、男子の包皮の肉を切ることです。しかし異邦人のクリスチャンは割礼を受けていませんでした。

異邦人のクリスチャンは割礼を受けるべきかどうかということは、当時の教会では大きな問題でした。しかし使徒たちは会議を開いて、異邦人のクリスチャンは割礼を受ける必要はない、イエス様を信じるだけでよいということを確認しました。

そもそも「割礼」には、どんな意味があるのでしょうか？割礼の命令を最初に受けたのはアブラハムですが、アブラハムは「**信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けた**」(ローマ 4:11)のです。割礼は、「信仰によって義と認められたことのしるし」なのです。旧約時代は、このしるしを「割礼」という形で表しましたが、新約時代は「洗礼」という形で表すようになりました。

ですから私たちも今、クリスチャンになった時は、割礼を受ける必要はなく、ただ洗礼を受ければそれでよいのです。

コリント教会には、ユダヤ人がクリスチャンになった時、割礼の跡をなくそうとしたり、異邦人がクリスチャンになった時、割礼を受けようとする人がいたようです。そういう人たちに対してパウロは、「召された時のままで」いなさいと言うのです。イエス様を信じたからといって、割礼の跡をなくしたり、割礼を受けたりする必要はない、そのままの状態でもクリスチャンとして歩みなさいと言うのです。

パウロは 19 節で「**割礼は取るに足りないこと、無割礼も取るに足りないことです。重要なのは神の命令を守ることです**」と言っています。当時は、「**肉体だけの割礼の者**」(ピリピ 3:2)と呼ばれる人たちがいました。この人たちは、割礼を受けているけれども、神様の命令を守らない人たちです。パウロはそういう「**肉体だけの割礼**」ではなく、「**御霊による心の割礼**」(ローマ 2:29)や「**キリストの割礼**」(コロサイ 2:11)を受けることが大切だと言うのです。「御霊による心の割礼」や「キリストの割礼」とは、イエス様を信じて新しく生まれて、洗礼を受けることです。肉体の割礼を受けても、人は神様の命令を守るようにはなりません。そうではなく、イエス様を信じて、新しく生まれなければ、人は神様の命令を守るようにはなら

ないのです。大切なのは、割礼を受けることではなく、イエス様を信じて、新しく生まれることなのです（ガラテヤ 6：15）。

私たちクリスチャンが気をつけなければならないのは、「肉体だけの割礼」ではなく、「肉体だけの洗礼」が起こりうることです。洗礼を受けても、神様の命令を守らないということがあるからです。洗礼を受けることはもちろん大切ですが、もっと大切なことは、イエス様を信じて、確実に新しく生まれることです。いくら洗礼を受けても、新しく生まれなければ、心から喜んで神様の命令を守る人にはならないのです。

3. キリストの奴隷

コリント教会には、奴隷の中からも、イエス様を信じてクリスチャンになった人がいたようです。パウロは、そのような人たちにも「召された時のままで」いなさいと言うのです。イエス様を信じたからといって、奴隷であることを気にする必要はない、もし自由になれるならなったらよいが、そうでないなら奴隷のままクリスチャンとして歩みなさいと言うのです。

パウロは 22-23 節で、「**主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となっははいけません**」と語っています。

イエス様を信じる私たちクリスチャンは、代価を払って神様に買い取られました。神様は、イエス様の命という代価を払って、私たちをご自身のものとしてくださったのです。

私たちは皆、神様のものです。私たちの主人は、神様です。私たちは、神様の奴隷です。私たちが従うべき唯一の方は、神様です。使徒たちは皆、このように言いました。「**人に従うより、神に従うべきです**」(使徒 5:29)。

では、神様の奴隷となった私たちは、人に従わなくてよいのでしょうか？そうではありません。パウロは、エペソ教会の奴隷のクリスチャンたちに向けて、このように言いました。「**奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて、真心から地上の主人に従いなさい。ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい**」(エペソ 6:5-7)。

神様の奴隷であるクリスチャンは、神様に従うゆえに、人に従うのです。私たちクリスチャンは、「召された時のままで」クリスチャンとして歩んでいますので、あらゆる社会の秩序と権威のもとに生活しています。クリスチャンの子どもは、親に従わなければなりません。クリスチャンの妻は、夫に従わなければなりません。クリスチャンの学生は、教師に従わなければなりません。クリスチャンの社会人は、上司に従わなければなりません。クリスチャンの国民は、政治家に従わなければなりません。私たちはそれぞれ、イエス様や神様に従うように、親や夫や教師や上司や政治家に従っていかなければなりません。それらの人々に従うことによって、神様に従うのです。

しかしパウロは、「人間の奴隷となつてはいけません」と警告しています。私たちは、神様に従うゆえに、人に従うのです。ですから、もし親や夫や教師や上司や政治家に、神様の御心に反することを求められた時には、従つてはならないのです。例えば、偶像礼拝を求められたり、安息日を破ることを求められたり、嘘をつくことを求められたり、その他罪を犯すことを求められた時には、従つてはならないのです。そのような時には、「人に従うより、神に従うべきです」という御言葉を思い出さなければなりません。

私たちの究極の主人は神様であり、私たちは神様の奴隷です。私たちが従うべき唯一の方は、神様です。それゆえ、私たちは単なる「人間の奴隷」となつてはいけないのです。

私たちは、イエス様の尊い命という代価を払って、神様に買い取られ、神様のものとされたのです。もし私たちが単なる「人間の奴隷」となつてしまうなら、イエス様の尊い命の犠牲を無意味なものにしてしまうのです。私たちは、単なる「人間の奴隷」とならないために、抵抗すべき時には抵抗し、戦うべき時には戦わなければならないのです。

おわりに

私たちは、「召された時のままで」歩むべきです。私たちは今置かれている状況の下で、精一杯クリスチャンとして生きるべきです。私たちにとって大切なことは、生活状態を変えることではなく、今置かれている状況の下で、どのようにクリスチャンとして生きるかということです。

もっとこうなったら、あんなだったらクリスチャンとして歩めるのにというのではなく、夫がクリスチャンだったら、子どもが救われたら、もっとよい学校だったら、収入がもっとあつたら、会社がもっと安定していたらと考えるのではなく、今置かれている状況を、神様に与えられた状況として受け入れて、今できることに集中して、クリスチャンとして精一杯生きることが大切なのではないでしょうか。今置かれている状況の中で、神様に感謝して、クリスチャンとして精一杯生きていければ、神様は次なる道を開いてくださるのではないのでしょうか。

最後に、一つの詩を読んで終わります。

神様が、あなたを植えて下さった場所で咲きなさい。諦めるよりもむしろ、人生のベストを尽くしなさい、そして花のように咲きなさい。咲くということは、幸せに生きることです。あなたの喜びが、他の人々を幸せにするのです。あなたが、幸せで、その幸せを笑顔で示せば、他の人々は、幸せを知って、彼らもまた幸せになるのです。

神様は、あなたを特別な場所にお植えになったのです。あなたが他の人々とそのことを分かち合えば、あなたの人柄が輝くでしょう。私たちが「咲く」と言っているのは、この「輝き」のことなのです。

神様が私を植えて下さった場所で私が咲く時、私の命は、命の庭の美しい花になるのです。

神様が、植えて下さった場所で咲きなさい。